

深江物語 (14)

本庄小学校の話(2) 校歌

深江塾 森 口 健 一

今回は本庄小学校の校歌の「歌詞」と「作曲者」の話である。
歌詞について

現在の校歌は、昭和二十二年（一九四七）十一月の学芸会で発表された。『本庄小国民学校沿革史』は「十一月二十三日（新嘗祭日）新装成った復旧の講堂で全一日に大プログラムの学芸会を民主的に実施 急作の校歌に始まり校歌に終わる（以上原文のママ）」と簡単に伝えている。

歌詞については、『沿革史』は何も記載していない。歌詞のみならず作詞・作曲者の名も記載がない。まず歌詞について校歌創作時から今日までの変遷について書く。

昭和三十五年度の卒業生に配布された校舎を背景にした校歌の写真がある（写真1）。校歌を書いた公式のものとしては一番古いものだろう。その写真にある歌詞の表記は次の通りである。
注・（ ）内は筆者記入。

(一)
茅渚の浦曲に 五輪のそびゆる
親和の学舎 さやかに陽をあび
心もゆたかに 生氣にみちみち
恵の潮に 仲よくむつばん



写真1 本庄小学校校歌

いざ強く 共に行かん

大志もて われら学童 わが本庄

(二)

武庫のやまやま 眺めはひらけて

浜のうら風 のどかに吹く里

歴史を語るか 青木の船うた

深江の老松^(おいら) 枝ぶりなつかし

いざぎよく古きひびき

身にうけて われら学童 わが本庄

(三)

東西文化の ^(豪華)ごうかに咲きそう

平和の郷土に 明るき学園

健康いやまし 心をつちかい^(培い)

世界のともども 手を取り仲よく

いざたたん 行くてはるけし

勇ましく われら学童 わが本庄

学校創立一〇〇周年に際して本庄小学校が平成十二年(二〇〇〇)一月三十日発行した『本庄のうつりかわり』という冊子に記載されている校歌の表記は、一番の出だしは「ちぬの浦和に 五輪のそびゆる」となっている。「ちぬの…」は大阪湾の別名でもあるが漢字が難しいのでひらがなに変えたのかもしれない。ただ、「うらわ」が「浦和」となっているのは感心できない。「ちぬの うらわ」の「うらわ」は漢字では「浦曲」で、雅語で

神戸市立 本庄小学校 校歌

作詞 藤田幸伸
作曲 信時 潔

1.ち ーぬ の うらわ に ご りん の そび ゆる
2.む ーこの やまや ま な がめ は ひら けて
3.と うざい ぶんか の ご うか に さき そう

し んわ の まな びや さ やか に ひを あび これ
は ま の うら かぜ の どか に ふく さと
へ いわ の きょう どに あ かる き がく えん け

こ ろも ゆ た かに セ いき に みち みち
き しを か た るか お おぎ の ふな うた
ん こん かい や まし こ ころ を つち かい

め ぐみ の うし おに な かよくむつ ば ん
ふ かえ の おい まつ え だぶりなつ か し
せ かい の と も ど も てをとりなか よ く

い ざつよく とともにゆかーん た いしもて
い ざぎよく ふるきひびーき みにうけて } われらがくど
い ざたたん ゆくてはるけし いさましく }

わ が ほ ん じょう じょう

本庄小学校校歌 (本庄小学校提供)

入江や海岸の意味である。「浦和」は埼玉県の県庁所在地の都市名である。本来の歌詞の意味は、「大阪湾の岸辺に五輪の塔が聳え立つ我が学び舎」なのである。

三番の二節目が、「平和の郷土に 明るき楽園」となっている。それまでの歌詞は「楽園」ではなく「学園」だった。しかし「学園」が「楽園」となれば、学校とは何かという疑問すらおきかねない。

この表記についての変遷を元学校長の平山先生の協力を得て



写真2 藤田幸伸校長
1943年3月
本庄国民学校
卒業アルバムより

判明した結果を記しておく。
昭和三十六年までは、「うらわ」と「学園」の表記。それから三十年間は卒業アルバムに校歌の記載はない。平成五年（一九九三）から平成十八年（二〇〇六）の卒業アルバムには「浦和」と「楽園」の表記になっている。平成二十三年のアルバムには「楽園」は「学園」に変更されたが、「うらわ」は依然として「浦和」のままである。

作詞作曲者について
『沿革史』には、校歌が発表された様子を簡潔に記載しているが、既述の通り作詞者や作曲者については記載がない。作詞者と作曲者については公式の記録は現在不明である。証拠や史料としては不十分を承知で筆者の手元にある資料をもとに作詞作曲者について述べてみたい。

筆者が校歌の作詞作曲者が誰であるかを記した文書を見たのは平成二十八年（二〇一六）二月八日、本庄小学校の校長室だった。当時の上橋秀司校長の話によれば「平成二十七年八月ころに校歌の由来について外部の方から問い合わせがあった」「その時には公式記録がないので、詳細は不明と回答した」という話



写真3 潮田先生の諏訪山小学校へ転任の記念撮影（1960年3月17日）元本庄村役場だった本庄公民館前で。前列右から北城喜三郎・中田常太郎・潮田・永井庄左衛門元村長・永田広治・平井富士夫、後列右から柴田次郎・丹羽新一郎・前中芳太郎・太田垣正雄元助役・寺田好雄。村長・助役以外は元村会議員。

だった。その時校長から「由来は不明だがこんな文書がある」と「校歌制定の経過」という手書きの文書を頂いた。そこには作詞者が「藤田幸伸校長が作詞された」と記されている。

「校歌制定の経過」という文書は手書きで、文の末尾には「1990・1・26」と書いてある。その書面全文を原文のまま引用する。

露に間に合うように、学校（校長）が作詞し曲は兵庫県民歌を借用した。『沿革史』に「急作の校歌」との記載はこのような事情があつた。著作権の問題はおそらく学校側も当初から認識していたのであろう。それゆえに「急作」とし、永らく平成二年（一九一〇）ろ。

筆者の母校で借用である事は年近くになり田義美先生や當伝統ある学校の

著作権の問題はおそらく学校側も当初から認識していたのである。それゆえに「急作」とし、永らく平成二年（一九九〇）まで作者（作曲者）不詳としてきたのである。

つまでも不明・不詳というのは好ましくないと思い、このたびの記述に至った。

謝辞 本稿の執筆にあたっては、神戸市教育委員会、本庄小学校に資料の提供などで協力を得た。末筆ながら厚くお礼申し上げます。また兵庫県民歌の楽譜はWEBサイト「『兵庫県民歌』の記録と記憶」(<https://hyogopreisong.wixsite.com/jp28>)に掲げられている。

兵庫縣民歌決る

歌おう 郷土の誇り

四月に盛大な發表會

郷士のほご
長崎神社新聞裏の手にて
うを飾りか
祖門再建に
の三百萬
民の空氣を
鼓舞するた
む新築法公
新田金義業

第一大審査を行つて優秀作三十
四圖選ばれたるを、全体委員會で
第貳次審査をして結果、一等一
福(賞金二万円)、佳作十福(賞
金百圓)を決定す。十八日(土)
の二、三發表せむ。

一等 川辺郡小枝村川原字大

壱七野口猛(有馬郡
選出)武蔵野影形町字浜生
六九齋長(金野町)△大
阪市淀田町字殿町七河、有
馬平(近畿多勢誌)△加賀郡田中
縣(新近)△二一號原田(新
近)△西宮市、高木西久保正
二田信祐、三浦敏△東原郡
並区天橋、一五九保田(金野
町)△社説、△頭取郷生訪町

兵庫縣民歌

一
 摩羅毘殿は
 北は北海　わき立つるごとく　日本のあけぼの
 遼・閩・蜀　其の脈々　なめなり今こそ
 是國まで　全開あり　布新設法
 全開る地か　ゆつて明ある　聖王の樂園
 十萬に上つた　いふやうぞ　若し地を
 田畑およむ　聖德の力をわれり　わが臣庶
 拓跋野部

| | |
|----------|-------|
| あかき山頂原 | さびの山々 |
| 時の流れて | 夢はながた |
| のびのびと | 湖のまじり |
| さきさきと | 巨主よと |
| にらむれど | 共におも |
| 御殿の光をわれど | わが居座 |

三

| | |
|---------|-------|
| 歴史はながけし | 文化の水 |
| さきさき光に | かがやくの |
| ゆるやかに | ためまの |

神命はあまたしき 世紀のこの朝
 いざわれ 共に擲じむ
 民衆のほごりをわれら わが丘麓
 四
 ごそれりこの民 祖國の直聲
 希望の光は 天地に満ちたり
 雷荷にひるます 心をあはせて
 進歩はひこすじ 世界の平和へ
 いざわれ 共に進む
 永済の理想をわれら わが丘麓

屈せず、その日の敵軍をつま
拔いて、かの明治、大正年代に
わが兵衛隊が果、大膽な義
勇をおこし、もう二度と下
つては来ぬまじか、益々
い私の歌が立派曲に作られ
てらんが、でもの大まか仕
事は終つて、こゝにあらはれ
上の喜ぶのまじか。

教壇生活十八年

一等當選の野口猛氏



「等当派の野口蘆氏(四二)は
小學校卒業後、大阪府で檢
定試験をうけて、本科正教員の角
許狀を得、川辺郡喜尾小學校代

野口氏は左の如く当選の喜びを露る（写真は野口氏）

[illegible]

再數卷を提出し、同郡宅塚、有馬郡三田國民學校の訓導となり、現在有馬郡三田國民學校校長に當り、十八年間教職生活をつづけている人、少年時代から詩歌、繪画に興味を持ち、雜誌その他に投稿してしばしば賞を得、かつ本社が募集した学生市歌に